

ふるさと再発見 第28回

Re-discovery Omihachiman

近江八幡偉人伝 ①

「多能なれども生来赤貧」の俳人

佃房 原元

今回からは、近江八幡ゆかりの偉人を紹介してまいります。

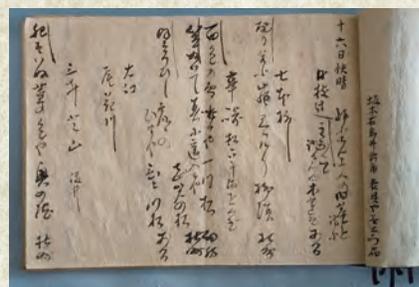
第1回は、俳人・佃房原元です。

八幡商人は本家を地元八幡に置いたため、当主たちは商いの傍ら文芸活動やその指導のため文化人との交流を盛んに行いました。八幡出身の俳人・佃房原元もその中の一人で、松尾芭蕉門下「蕉門十哲」の一人である宝井其角の門下です。その人物像について資料は少ないのですが、八幡商人のひとり伴蒿蹊が記した『近世畸人伝』のなかに、佃房に関する記述があります。蒿蹊は、早くから佃房と知り合いで、「原元佃房といふは淡海八幡の人にて、多能なれども生来赤貧なり。酒を好み意気慷慨」と、有能だが貧乏で豪快な性格であると記しています。



「天性の自由人」佃房原元を信頼し支えた八幡商人 西川庄六家（新町通り）

また、弟子であった八幡商人・西川庄六も、佃房の七回忌法会で捧げた追悼文で、「八幡で竹庵という庵を結んで、焦門の開発を行っていたが、生前酒を好んでいたこと、野山に遊んでは、夕の星に華の移ろいを嗜み、時鳥・蟬の初声にうかれては隊日であるなど、世捨て人のように浮世に漂う様子」（原文ノママ）と記しつつ、それが「誠



佃房原元が吟行の際に記した湖西旅路の記録帳（唐崎から三井寺参詣の部分）

に風雅のよそほひ」と、天性の自由人であると評しています。

一方、佃房の作風は、花鳥風月の趣をおりませた技法はほとんどなく、人情・機敏・人の世の愚かさ・生命のはかなさ、また、自身が庵の中で送る生活の身近なものばかりを題材にしています。

ところで、先に触れた「八幡の竹庵」とは、佃房が住んだ庵のことです。佃房は、当初伴蒿蹊の祖父三代目伴莊右衛門の別邸に住んでいました。その後、八幡堀の船着き場・新町浜の少し西に庵を建てました。静かな竹林の中にあつたことから「竹庵」と名付け、ここが、八幡の俳人たちの拠点になったとともに、全国からの俳人たちを迎える格好の場所ともなりました。

また、八幡の弟子たちとたびたび吟行の旅をし、宝暦12（1762）年4月には門人の西川庄六はじめ3人の弟子と京都醍醐から奈良、吉野、大坂平野から西宮・須磨・姫路と数多くの名所を回っています。庄六とは、湖西から湖南を巡る旅行をしており、日数は不明ですが、その間に88句という多くの句を詠んでいます。このように、佃房の数多い門人のうち、最も信頼し支えてくれたのは、西川庄六家でした。

佃房の晩年は健康状態が思わしくなく、そのうえ視力減退で不自由な身となりました。病中に書き記した「冬日和、雪まつころ、忘れける」の一句を残し、明和6（1769）年、その生涯を終えるのです。

佃房が残した足跡として、八幡では芭蕉が非常に好まれ、小船木町の願成就寺には、芭蕉の句碑が多く建てられています。



願成就寺にある芭蕉句碑

人口と世帯 令和3年3月1日現在 ()は前月比

総数	82,322人	(+7)
男	40,475人	(+8)
女	41,847人	(-1)
世帯	34,573世帯	(+46)

※外国人住民(42カ国・地域/1,587人)を含みます。

！ 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。